

ふるさとの育む人 #34「ごごみ」

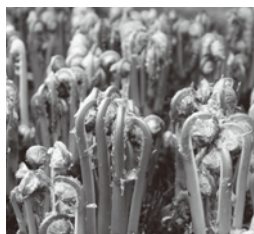


育む人 **佐々木 伴子^{ともこ}さん** 平鹿地区 61歳

生産品目：ごごみ 6,000株(ハウス1棟)、
水稲7.5畝、野菜類50畝、シシリアンルーージュ5畝

やるからには楽しくー。仲間とともに“春のたより”を育む

雪解け後の比較的早い時期に顔を出す春の山菜、「ごごみ」。シダ類の多年草で別名「クサソテツ」と呼ばれるこの山菜。私たちは一般に、直径15cmから22cm程度の、穂先をくるりと巻いたクサソテツの生長過程の一端を「ごごみ」と呼んでいます。管内では現在、食用菊部会に所属する5人の生産者とその栽培に取り組み、年間3トンを生産。1月から4月にかけて、主に関東市場に向けて出荷しています。一足早い春を感じることでできるそのみずみずしい味わいは、市場からも定評があります。



冬期農業として導入。部会の中で最も早く出荷

生産者の一人、佐々木伴子さんは、ごごみ栽培7年。23歳で嫁いで以来、25年間はパート勤めと兼業で米や野菜の栽培に取り組んできましたが、退職を機に、冬期にも生産できる品目としてごごみを導入。以来、春から秋にかけては野菜や米づくり、冬期間はごごみ栽培という通年サイクルで生産しています。



伴子さんは現在、ハウス1棟の中に3列にベッドを設置し、計6,000個の株を栽培。ベッド1列につき2,000個の株を、時期をずらして設置し、出荷時期を調整しながら生産しています。今年は12月下旬に1列目の株を設置し、1月上旬から出荷を開始。部会の中でも最も早く開始したその生産は、いま、出荷最盛期を迎えており、多いときには1日で200パック(50g/パック)を出荷しています。

水と温度のシンプルな栽培。初心者にもおすすめしたい

本来は、山に自生しているごごみ。これを冬期に生産するためには、夏場に株を冬眠、させる必要があります。伴子さんは、夏から秋にかけて、次の生産時期に必要な株を冷凍庫で保管。出荷時期を逆算して株を取り出し、冷凍庫よりも温度の高い冬のハウスに設置することで、ごごみが芽を出す仕組みを利用し育てています。



伴子さんは、その栽培について、「肥培管理を必要とせず、水と温度の管理で生産することができる。初心者にもおすすめしたい品目」と、ごごみの魅力を語ります。また、部会については、「互いの圃場を行き来したり、栽培講習会を行ったりと仲間意識が強い。ともに圃場で笑い合える関係はとても嬉しいもの」と、満面の笑みで続けます。

雪国からの“春のたより”を多くの方に

「やるからには楽しく」を信条に据える伴子さん。今日も足しげくハウスに通い、いきいきとその収穫作業にあたっています。伴子さんのハウスでは、ごごみの出荷は4月下旬頃まで続く予定。雪国横手から届く“春のたより”は、いま、管内各地のハウスの中でつぎつぎと顔をのぞかせています。